

## 心理システムとコミュニケーション

沢谷 豊

ルーマンの著作もしだいに翻訳され、日本でもかれの仕事が明らかになってきている。本稿もルーマン理論の紹介を目指すものである。本稿ではとくに心理システムに焦点を当て、知覚との比較でかれのコミュニケーション概念にせまろうとする。そして、かれが心理システムの限界をこえるものとしてコミュニケーションをとらえていたということ を明らかにしたい。

### 1 コミュニケーション

周知のようにコミュニケーションについてはさまざまなとらえ方がある。たとえば、世代間のコミュニケーション・ギャップが問題とされてから久しいが、そうした問題意識が前提するコミュニケーションのとらえ方は、コミュニケーションが双方向的で、しかもお互いに相手のいうことを理解することが真のコミュニケーションである、すなわち意思の齟齬の存在しないコミュニケーションが本来的であると考えられているように思われる。コミュニケーションの成立には誤解や対立があるままでは不十分で、合意がなければならないとする考え方である。しかし、お互いの合意がみられなくても、双方向的な会話があればコミュニケーションであるという考え方もある。実際にさまざまな対立があるのがふつうだし、誤解を回避しようとしてもなかなか難しいのが現実である。そこで、あるべきコミュニケーションではなく、現実のコミュニケーションに目を向けるならば、合意までふくめなくてもよいのではないかとする考え方である。というよりは、客観的な知識をもとめようとするならば、コミュニケーションに合意をふくめることは、それがあつべきコミュニケーションを目指すものである以上、ふさわしくないということになる。これにたいして、さらに一方向的なものでもコミュニケーションたりうるとする考え方もある。もし双方向的でなければコミュニケーションでないとするならば、マス・コミュニケーションは当然コミュニケーションから排除されること

になる。もちろん、そうしたとらえ方をすることは自由であるし、さまざまなコミュニケーション概念があってしかるべきである。

ルーマンのコミュニケーション概念は、最後に述べた一方向的なコミュニケーション概念にもっとも近いが、さらにいくつかの限定が加わってくる。それをみていこう。

コミュニケーションが可能となるためには最低二人の人間が必要である。この二人の人間を、1984年に出版されすでに翻訳もある『社会システム理論』にしたがって、とりあえず「自我 (Ego)」と「他我 (alter Ego)」とよぶことにしよう<sup>1)</sup>。そしてこの自我と他我であるが、これはふつうにはコミュニケーションにおける情報の受け手と送り手に対応する。つまり、自我がふつうにいわれる情報の受け手、他我がふつうにいわれる情報の送り手になっているのである。ただし、ここで注意しておかなければならないことは、ルーマンのコミュニケーション概念にあっては情報は伝達されないということである。したがって、情報の送り手や受け手といった表現も、ルーマンのコミュニケーション概念を理解する上では、きわめてミスリーディングな表現である。それゆえ、以後はできるだけ情報の受け手や送り手といった表現を使わずに<sup>2)</sup>、自我と他我、ないしはそれに準ずることばをもちいることにする。

本来コミュニケーションは継続的に進行していく過程であるが、そうしたコミュニケーションのもっとも小さな単位——これはルーマン理論においては、社会システムのもっとも小さな要素でもある——がまず問題とされる。ルーマンによれば、コミュニケーションは「情報 (Information)」, 「表出 (Mitteilung)」<sup>3)</sup>, 「理解 (Verstehen)」という3つの選択の統合によって成立するできごとである。まず、他我が何らかの情報を選択し<sup>4)</sup>、さらにそれをどのように表出するかを選択する。より正確な表現をするならば、情報の選択と表出の選択は他我に帰属させられる選択である。表出のもっとも一般的な例は、話すという行為である。もちろん、言語をもちいない表出というものもある。たとえば会議の席である人が手を挙げたとすれば、それは一定の発言を求める行為であり、「意見があります」と発言することと同じことを意味している。表出とは他我の身体の動き——ルーマンはこれを「コミュニケーション行動 (kommunikative Verhalten)」ということもある——ないしはその結果 (たとえば文字) であり、これもまた他我に帰属させられる選択である。これに対し、自我はそうした表出を知覚するわけであるが、それだけではコミュニケーションにはならない。それはたんなる知覚にすぎない。これに対し、自我が、他我の表出と情報を区別するならば、それによりコミュニケーションが成立することになるという。つまり、ルーマンにしたがえば、他我の行動ないしその結果をただたんに知覚するだけではコミュニケーションにならないのであり、それを表出として、つまりその背後に一定の情報があるものとしてとらえることにより<sup>5)</sup>、はじめてコミュニケーションが成立するのである。そして自我は、この区別にもとづいて、情報や表出について内容的に理解するのである。したがって、前にあげた

3つの選択のうち、理解は自我に帰属させられる選択であるということになる<sup>6)</sup>。

相手がどんなに話しかけてこようとも、自我がそれを情報の表出として理解しなければコミュニケーションは成立しない。相手を他我として、ひとりの人格として認めていない場合などがこれにあたる。同じ人間という生物であれ、その人格性が認められないならば、その他者は自我にとってコミュニケーションのパートナーではないのである。発言権が認められない奴隷や、さらには「キチガイ」などは、そうしたかたちで人格が剥奪された典型的事例であろう。これにたいして植物人間状態になった相手であれ、その人のほんの少しの指の動きや目の動きを表出として自我が解釈するならば、つまり相手が何かの情報をあらわそうとした活動としてそうした動きを自我が解釈するならば、そこにはコミュニケーションが成り立っているのである<sup>7)</sup>。

ルーマンのコミュニケーション概念の特徴はこのように解釈者側に優位性を認めることにある。自我が相手の行為をたんに知覚するにとどめるか、表出として解釈するかによって、コミュニケーションが成立するかどうかが決まるのである。従来のコミュニケーション概念においては、情報の「送り手」は「受け手」よりも優位にあるか、少なくとも等しい位置にあるとされるのが一般的であるように思われる。これにたいして、ルーマンの場合には、「受け手」の役割が明らかに優位にある。極端な場合、「送り手」にコミュニケーションの意図がなかったとしても、「受け手」が相手の行為を表出と理解してしまったら、——そしてそれにもとづいて相手にたいして今度は自我が表出行為を開始してしまったならば——コミュニケーション過程が進行してしまうのである。たとえば、相手が自分の方を見ているのを、自分にたいする威嚇と解釈すれば、それに対してそれ相応の行動で対処することになるかもしれない。また相手が自分の方を見ているというその行動を自分にたいして好意をもっているそぶりとして解釈すれば、それに対し自分から声をかけて、新たな人間関係がうまれる大きなきっかけとなるかもしれない。もちろん、相手はただ考え事をしていただけなのかもしれないのである。この場合には、誤解がコミュニケーションを生みだしているといってもよいであろう。というよりも、理解と誤解を区別することはきわめて難しいのである。いずれにせよ、相手にはコミュニケーションの意図がなくても、自我による解釈がコミュニケーションを、いわば事後的に成立させてしまうのである。

それではなぜ、相手にコミュニケーションの意図がないにもかかわらず、コミュニケーションを成立させてしまうようなことが起こるのであろうか。なぜこのような誤解が生じるのであろうか。一般に、私たちは知覚によって情報をえることができる。しかし、このことについては十分に注意をはらう必要がある。というのは、情報とはあらかじめ環境のなかに存在し、それを私たちが知覚によってとらえ、そして情報を獲得するといった性格のものではないからである。情報は、ルーマン流にいうならば、システムのなかで構成されるものであり、環境のなかには存在しない。コミュニケーションの

場合も同様である。自我は他者の表出しか知覚することはできないわけである。そして、表出の背後にあると想定される情報を、自我は自分の内部で構成するしかないのである。つまり、情報とは、環境のなかに客観的に存在し、それを他我が取り上げて、自我に伝達できるといった、モノ的性格をもったものではないのである。接続されたコンピュータの間ならば、同じ情報を伝達することができるかもしれないが、コミュニケーションにおいてはこうしたことは不可能である。コミュニケーションとは、他我が表出をそのまま受け取ることではない。もちろん、他我が表出したことだけを自我に伝えたかったのかもしれないし、そこには誠実さ以外の何もないのかもしれない。しかし、そうだとすると、他我が表出したこと以外にもさまざまなことを体験し、知っているはずである。したがって、表出しなかったことも数多くあるはずである。なぜそうしたことを表出しないのか、なぜ一定の表出を選んだのか、そうした疑問はなくなる。こうした疑問をもつことが、まさに他者を人間以外の動物と同じようなたんなる身体ではなく、自分と同じもうひとりの自我、つまり他我であると考えていることのあらわれなのである。

## 2 オートポイエーシス・システムの閉鎖性

ここで、ルーマンの基本的な立場を確認しておこう。かれは全体社会を理論的にとらえようとしたわけであるが、そのさいよりどころとしたのがシステム論である。そのシステム論は、かれにしたがえば、クローズド・システムからオープン・システムへ、そしてさらにオートポイエーシス・システムへとパラダイム転換をしてきた。問題となるのはこのオートポイエーシス・システムである。

オートポイエーシスはもともと生命を特徴づけるために考えだされた概念、すなわち生物学の概念である。現在ではそれがさまざまな分野に応用されるようになり、どちらかというと収拾のつかない状態になっている。それでもなお、ルーマンはこのオートポイエーシスの意義を評価し、それを社会現象に応用する。また、心理現象にも応用しようとしている。社会システムと意識がそれであり、両者ともオートポイエーシス・システムであるとされている。

オートポイエーシス・システムについて、それをかれは次のように定義する。すなわち、オートポイエーシス・システムとは、その要素のネットワークを通じて、その要素を生産・再生産し、それによってシステムそのものを生産・再生産するシステムである。かれにしたがえば、オートポイエーシス・システムはみずからの要素をすべてみずからつくりだすものであり、したがって、システムの要素ばかりでなくその構造や境界などもつくりだす。そうした要素が社会システムではコミュニケーションであり、心理システムでは思考であるとされる。ただし、意識の要素については、ルーマンの理論の中でもおれが見られるし、本稿でもルーマンとはことなる用語法を後にもちいることにする。

とりあえず、社会システムはコミュニケーションのネットワークを通じてコミュニケーションを生産しつつ、意識は思考のネットワークを通じて思考を生産しつつけるとしておこう。

こうしたコミュニケーションや思考をかれは「作動 (Operation)」とよぶ。オートポイエーシス・システムの基本的考えは、この作動のネットワークの閉鎖性にある。すなわち、あるシステムに固有の作動はそのシステムの内部にのみ存在し、その環境には存在しないということである。その典型的な例の一つとしてルーマンは神経システムをあげる。頭脳は外部からの刺激を受けることはあっても、それはシナプスの電氣的パルスに変換される。視覚・聴覚・嗅覚などさまざまな刺激があっても、それはたんなる電氣的パルスに変換されてしまうのである。そしてそれ以後は、内部の刺激が内部に刺激をつくりだしていく。そしてその結果として、知覚が可能となり、思考が可能となるわけである。こうした作動の閉鎖性がオートポイエーシス・システムの特徴なのである。しかも、この閉鎖的な作動が同時に認識をも可能としている。

意識は神経システムをもとに成立するオートポイエーシス・システムであるが、みずからを成りたためしている神経システムや、その基礎にある生命システムについては認識することはできない。私たち自身は自分の神経システムがどのように作動しているのか、自分の身体をかたちづくる細胞がどのように死滅し、再生産されているのかを知らない。しかし、そうしたものが心理システムのオートポイエーシスが可能となるためには必要不可欠であることは間違いないであろうし、また一定の物理的・化学的な自然環境についても不可欠であろう。したがって、オートポイエーシスの閉鎖性とは因果的な閉鎖性を意味するものではない。それは作動上の閉鎖性である。つまり、システムに固有の作動がシステムの環境には存在しないということである。システムの要素はシステムの環境で作動することはできない。私の意識は私の心理システム内でしか思考することはできない。他者の頭脳のなかで思考することも、自然環境のなかで作動することもできない。したがって、コミュニケーションとのかかわりでいうならば、他者の意識のなかにある情報が自我の意識に伝達されるといったことはありえないわけである。そのような伝達手段はまったく存在しない。だからこそ、ルーマンのコミュニケーション概念にあつては、情報の伝達ということが否定されるのである。オートポイエーシス・システムの作動的閉鎖性という前提に立つかぎり、したがって心理システムの作動的閉鎖性という前提に立つかぎり、一つの心理システムからもう一つの心理システムへと情報を伝達することはできない。同様に、情報を環境から取り入れることもできない。したがって、情報はシステム内で構成される<sup>8)</sup>しかないということになる。

システムが環境のなかで作動できないということは社会システムについてもあてはまる。つまり、コミュニケーションという社会システムの作動は、社会システムの内部だけにあるのであり、その外部で作動することはできないのである。ここからきわめて奇

妙に思われるテーゼがでてくる。すなわち、社会システムだけがコミュニケーションできるのであり、人間はコミュニケーションをすることができない（例えば1990a, S.31）。これはオートポイエーシス・システムの作動的閉鎖性を別の側面からとらえたものである。意識システムは自分がコミュニケーションをしたと思ったとしても、それはそのように思っているだけであり、思考というみずからのオートポイエーシスをおこなっているだけなのだ、——もちろん、ルーマンのコミュニケーションの定義にもとづくかぎりではある——ということになる。

### 3 「私」の構成

心理システムがその独自の作動をもとに認識することができるように、社会システムもその独自の作動であるコミュニケーションによって認識することができる。しかし、それはシステムに固有の作動による認識であり、それ固有の制約のもとに可能となるもののなのである。

心理システムの認識とコミュニケーション・システムの認識の重要な相違点は、心理システムが直接的に知覚できるのにたいし、社会システムには知覚能力がないということであろう。しかし両者の共通点もある。その一つに両者とも「自己言及（Selbstreferenz）」が可能であるということがある。ここで自己言及というのは、「外部言及（Fremdreferenz）」と区別された意味での自己言及である。ことばを換えるならば、自分と環境を区別できるということである。たとえば、社会システムはみずからをコミュニケーションのネットワークとして認識し、コミュニケーション以外のもの（＝環境）とみずからを区別することができる。そうした意味で、自己言及が可能なシステムである。たとえば、「リンゴ」ということばと実際のリンゴを混同することはない。「リンゴという言葉は3文字でできている」という表現と、「リンゴはおいしい」というときでは、リンゴの意味する対象は明らかにことなっている。前者は社会システムの自己言及にかかわるものであり、後者は外部言及である<sup>9)</sup>。

ここでは心理システムの自己言及について、それがどのようにして可能となるのかをルーマンにそってみていこう。ただし、本稿ではかれの用語法からずれるが、心理システムと意識とを区別しておきたい。ルーマンにあってはこの両者はあまり厳密には区別されていないように思われる。というよりは互換的にもちいられている場合が多々みられる。おそらくはその方が正しいのかもしれないが、説明をより直感的でわかりやすくするために、両者を区別しておきたい。すなわち、心理システムは知覚をふくむより広い意味でもちい、これに対して意識は思考や志向性という作動を要素とするものとし、心理システムの一領域としておきたい。そして、意識をのぞいた心理システムの作動としては、知覚ということばをもちいることとする。

かれはまず、意識は他の対象との比較でみずからの身体を好意をもって「識別する (beobachten)」<sup>10)</sup>、というテーゼをたてる。つまり、身体の場合なら、みずからの身体と、それ以外のものを区別し、その一方を指示するということである。そのさい、みずからの身体に注意を向けることもあれば、それ以外のものに注目することもある。そのとき、意識はみずからの身体を好んで識別するのであり、しかもこうした識別は必然的であるという。しかし、かれにしたがえば、意識は世界のあらゆるところに存在するし、またどこにも存在しない。そうした意識がみずからの身体を通してそのアイデンティティを獲得するという。かれは「意識が自己自身とかわろうとするならば、それはいわばゲストとしてその中にいる、みずからの身体のためをかりなければ不可能である」(1989, 129) と述べている。ここにみられるのは空間のメタファーである。皮膚によって区別されるみずからの身体の内部と、その外にある環境とが区別され、意識がその内部に——ホストとしてではなく——ゲストとして位置づけられる。もちろん、知覚はすべて心理システムの内部の現象である。しかし、こうした空間のメタファーと意識を身体内部に位置づけることにより、環境が身体の外に位置づけられるのである。まさに、環境が外化されるのである。しかも、身体にとって意識はあくまでもゲストであり、「主体」などではない。こうして、外部を観察する「私」というイメージがつりだされる。はじめは確固とした構造をもたなくても、自分と環境を区別するこうした経験が積み重ねられることにより、やがて私たちは意識をもった身体としてみずからを確信するようになるのである<sup>11)</sup>。

少し長くなるが、ルーマン自身に語らせてみよう。

みずからの身体を識別することには二重の利点がある。まず、身体はつねにそばにあるということ、そして身体をその環境において外から識別するように識別できるということである。意識はみずからの身体を識別することで、身体におけるシステム・環境の差異を習得し、それにもとづいて、それ自身のなかでしか作動しないにもかかわらず、みずからを世界のなかに位置づけることができるようになるのである。これによって意識は、たとえば自分が出した音と環境に帰属させられるべき音のように、自分の身体に属しているものと属していないものとをきわめてすばやく学習するようになる。身体として識別されるオートポイエーシス・システムのコングロマリットは、それ自身すでに多文脈的に組織されているのだから、意識は身体で実験することができる。つまり、身体に自分自身を触らせたり、自分で出した音を聞かせたり、みずからの運動を見るようにさせたり、とりわけこれらすべてを突然取りやめてその中止の効果を識別させたりすることができる。この種の実験的作動が意識による識別のもとで一定期間つづけられるならば、その結果として、自己帰属と外部帰属の区別がほとんど不可避的になる。そしてこの不可避性が今度は現実意識の構成を速めるファク

ターとなるのである。(1989, S.129) (傍点引用者)

このようにして、「私」が構成される。しかも、それは私にとって接近可能な唯一の心理システムのごく一部分、すなわちみずからの身体とその中に位置づけられた意識のみによって構成されるものである。本来ならばみずからのものと考えてもこれといって問題はないはずのものが、環境として私の外のものとして外化されてしまう。そして、このようにして構成された私は、選択することのできる主体とされ、人格をもつ人間であるという Identität がつくりだされる。そうした観念で問題になるのは、その本質ではなくそれがどのように構成されるのかということである。たとえば、「人間」という表現について、ルーマンはそれは数多くのオートポイエーシス・システムの複合体であり、それを一つの統一体であるとしてとらえることは不可能であるという。しかし、私たちはひとりの「人間」ということばをもちいるし、そうしたことばが社会的に通用する。つまり、人間とは社会通念化された観念である。そうした通念の背後に本質的なものを認めない、脱実体的な世界観がルーマンの社会理論の根底に存在している。

#### 4 他我の構成とコミュニケーション

私という観念の構成とならんで問題になるのは、他者の構成である。もう少し正確にいうならば、他者を認識や選択能力をもつ自我、つまり他我——「人格 (Person)」ということもある——として構成することはいかにして可能か、という問題である。

まず、知覚野にあらわれるさまざまなものから人間が区別されなければならない。そしてその他者は、私と同じようにその内部に意識をもち、認識や選択能力をもつものとされなければならない。そうしたものとしての他我の構成を、ルーマンは、コミュニケーションによって説明しようとする。すなわち、コミュニケーションとは、他者の行為を表出として、つまり情報と区別される表出として理解することにより成立するわけであるから、その根底には、他者がある情報を選択し、そしてその情報を表出する方法を選択するということがあるからである。他者の行為をたんに知覚するだけではこうした理解は生じないし、したがって、他者を選択者としてとらえる必要もないわけである。他者の身体の動きを見たり他者から発せられた音などを聞いたりするだけで、つまりたんに知覚するだけならば、その他の自然現象を知覚する場合と違いはない。人間以外の動物の動きや鳴き声を知覚する場合と違いはないのである。そうした行為や音声の背後に、情報の存在を仮定することが決定的なわけである。つまり、たんなる知覚ではなく、他者の身体の変化を情報をともなう表出として知覚することが、他者をもうひとりの自我、つまり他我として認識することの前提なのである。

もちろん、こうした他我、すなわち人格としての他者の構成は、おそらくはたんなる



一方向的な因果的説明、コミュニケーションによる説明によってすむものではない。社会化や教育という別の側面があって、はじめて可能となる現象であろう。いずれにせよ、他者の行為や他者の発した音声などを、その背後にある情報と区別すること、つまりコミュニケーションがきわめて重要な意義をもつという指摘には、いくら高く評価しても評価しきれない。それこそが、心理システムの作動的閉鎖性を補償するものだからである。

前述したように、コミュニケーションとは、ルーマン流の定義にしたがうならば、情報、表出、理解という3つの選択の統合である。そして、情報と表出は他我——人格をもつ他者——に帰属させられる選択であり、理解は自我、つまり私に帰属させられる選択である。自我は他者の情報の選択を直接にみることはできないし、なぜ他我がある一定の表出を選択したのかもわからない。自我にとって知覚できるのは、他我的表出のみである。ただ、自我は、他我が何らかの理由で一定の表出をしたと解釈することはできる。そして、そのことは、その表出の背後には他我による情報の選択があるのだとする解釈があることを意味する。他我的挨拶でさえ、状況によってはきわめて多くの解釈を許容するものである。相手は、ときにはにこやかに、ときにはぶっきらぼうに、またときには怒った様子で、そうした行為をするのである。ひょっとすると決められた時刻に遅れた自我にたいして、皮肉の意味も込めてにこやかに「おはよう」と挨拶したのかもしれない。相手の意識を直接的に知ることのできる手段は存在しない。それでもなお、コミュニケーションにかかわることによって、つまり、自我が解釈という選択をすることによって、他我的考えや知覚内容を間接的にはうかがい知る——推しはかる——ことができるかもしれないのである。他我的意識と自我の意識、この2つの心理システムは作動上ではけっして交わりあうことはない。作動的には完全に分離した閉鎖システムである。そうした心理システムにそれぞれ帰属させられる、3つの選択が総合されることにより、コミュニケーションという創発的なできごとが成立する。これがルーマンのコミュニケーション概念なのである。

もちろん、通常は、コミュニケーションが単一のできごとで終わることはない。マス・コミュニケーションのような一方向的なコミュニケーションの場合でも、読者や視聴者が報道の内容について他の人と話すことがあるし、そうしてコミュニケーションが継続していくのである。ただ、対面的なコミュニケーションでは典型的であるが、私という自我はつねに理解という解釈だけをおこなうのではなく、次のコミュニケーションでは、情報を選択し、それを表出するのである。そのときには、私は役割を替えることになる。すなわち、私は他我的役割で情報と表出を選択し、他者が自我の役割で理解の選択にかかわるが、表現が必要以上に込み入ってくるので、コミュニケーションに接続する後続のコミュニケーションについては、ここではこれ以上検討することは控えたい。いずれにせよ、確認しておきたいのは、心理システムの作動上の閉鎖性という基礎のも

とで、なおかつそれを越えるものとして、まさに創発的現象として、ルーマンがコミュニケーションをとらえているということである。

## 5 コミュニケーションと社会システム

コミュニケーションの発生については、言語の発明が決定的に重要な役割をはたしている。言語がなければ、表出と情報を区別するといったことはなかなか生じないであろう。もちろん、人間以外の動物でも、仲間に危険などを知らせるなどの合図はある。しかし、それはかなり単純なレベルにとどまっているように思われる。少なくとも、近代科学のような知識を蓄積できた動物はいない。言語こそが、言語のもつ記号的性格こそが、それをもちいる行為の背後に情報というものを想起させる、すなわち情報と表出の区別——コミュニケーション——を発生させるもっとも強力なメディアなのである。そして、そこにはたんなる知覚とはことなるまったく別の世界——社会システム——が発生してくるのである。それは、心理システムの作動とはまったくことなる作動——コミュニケーション——を生産・再生産するシステムである。もちろん、コミュニケーションには心理システムの介在が不可欠である。しかし、コミュニケーション・システムとしての社会システムは、個々の心理システムには還元することのできない独自の構造やダイナミズム、歴史をもっている。

社会システムの発生にさいしては言語が重要なはたらきをするが、コミュニケーションが必ずしも言語を必要とするものではないことも明らかである。しかし、言語をもちいないコミュニケーションがそれなりに機能していくためには、やはり言語の裏づけが重要であると思われる。一度言語が発明されたあとならば、そうした言語を身振りで置き換えることは比較的容易におこなわれうるし、そうした身振りで十分にコミュニケーションが可能となる状況も多くなる。とくに、対面的状況では、そうした言語をもちいないコミュニケーションがきわめて重要なはたらきをしている。しかし、細かなニュアンスや社会システムに固有の構成となると、やはり言語のはたらきがきわめて重要である。

まず、言語をもちいるコミュニケーションの特徴としてルーマンが指摘するのは、否定の作用である。この否定の意義については、かなり早くから指摘されていた。たとえば、「ここにリングがある」ということならば、実際そこにリングがあれば、言語なしでも何とか他我の意図を理解できるかもしれない。ちなみに、コミュニケーションの内容といわゆる現実は一貫している。しかし、言語をもちいないならば——手話は言語をもちいたコミュニケーションであるので当然もちいることはできない——、他者の行為から「ここにリングがない」ということを読み取ることは、そこに実際にリングがない——コミュニケーションの内容と現実が一貫している——場合でもきわめて難しいであ

ろう。たしかに何かがないといおうとしているのかもしれないが、そのないものがリンゴであるということをコミュニケーションすることはできないであろう。それに対して、言語をもちいば、「ここにリンゴがある」という内容も、「ここにリンゴがない」という内容も、容易にコミュニケーションすることができる。しかも、それは現実との対応関係にかかわりなく可能である。

ちなみに、いわゆる現実とコミュニケーション内容が一致していない場合には、それは誤りであるということになる。逆に言うならば、言語をもちいることによってはじめてまちがえることができるのである。さらに、言語によりまちがえることが可能となるわけであるが、意図的にまちがえることも可能となる。つまり、嘘をつくこともできるようになるわけである。さらに、現実とはことなる内容をコミュニケーションできるということは、目の前にない事柄、たとえば昨日のできごとや遠くの場所でのできごとについてもコミュニケーションできるということになるし、空想上のできごとや可能性についてもコミュニケーションできるということである。神による天地創造についてのコミュニケーションは言語なくしては不可能であろう。このことは、当然のことながら、神という観念をとともなう宗教の発生は、言語の発明をもとに、したがって言語の発明のあとに可能になったということの意味するものであろう。

もう一つ言語の特徴として指摘しておきたい点は、言語のもつ区別作用である。言語には、言語固有の区別がある。たとえば、上下、左右、善悪などといったものがあげられるが、そうした区別は知覚の世界には存在しないものである。これに、幸・不幸、浄・不浄などの区別をつけ加えることができるし、ルーマンの社会システム論との関係では、たとえば法・不法、真理・非真理、所有・非所有などの区別もあげられるだろう。さらには、現実と規範という法システムに固有の区別もある。また、区別の対象が明示されない区別も多い。たとえば、自然ということばがどのような意味で使われているのかは、その対概念なくしてはおおよその見当もつけられない場合さえある。文化との対比で「自然」ということばがもちいられたり、神との対比、または人間との対比で「自然」ということばがもちいられたりする。いずれにせよ、この区別という言語のもつ性質は、いわゆる現実とはことなる独自の構成を社会システムにもたらすものであり、識別に、したがってまた認識に固有の特徴である。

こうした言語の発明であるが、それはさまざまなかたちで進化の要因となる。まずは言語は話し言葉というかたちでもちいられるが、やがて文字が発明されることになる。この文字の発明により、コミュニケーションの範囲は時間的にも空間的にもいっきに拡大されることになる。さらに印刷が発明されると、文字によるコミュニケーションは社会的にも拡大される。そして、ラジオやテレビ、コンピュータなどの発明は、社会システムの構造にきわめて大きな変化をもたらした。このようなさまざまなコミュニケーションの媒体により、近代科学も急速な発達をみるようになったのである。常識的な知

識と科学的な知識のちがいは、個々の心理システムのちがいから説明できるものではない。全体社会というコミュニケーション・システムとその構造の変化——たとえば科学システムという下位システムの分化や——、情報のさまざまな記憶・普及・処理技術によって可能となったのである（1990b, S.54）。

そして、こうした社会システムの進化の一成果として、社会システム論もあるわけである。もちろん、ルーマンの社会システム論の基礎となっているシステムも、システムと環境との区別をもちいた認識であり、認識の外にはそうした区別は存在しない。いわゆる現実の世界にはシステムや環境に対応するものは存在しない（1988, S.16）。それはシステムと環境という区別をもちいた認識である。ただし、社会システムのなかに、そうした区別をもちいたコミュニケーションが存在している、これがルーマンの主張であるように思われる。それがコミュニケーションみずからとその環境を区別する、つまり内と外を区別するのだ、と。社会システムはコミュニケーション・システムであり意味システムである。そうしたコミュニケーション・システムは、コミュニケーションというみずからの作動によりコミュニケーションとコミュニケーション以外のものを区別できる。そして、みずからをコミュニケーション・システムとして、その環境から区別できる。それは、コミュニケーションという作動による構成のなかで、その環境を外化し、みずからとその環境を識別する。

このようなコミュニケーションをもちいた構成により、心理システムの作動的閉鎖性が乗り越えられることになるが、コミュニケーション・システムも心理システムもオートポイエーシス・システムであり、その作動をそれぞれのシステムの内部でしか遂行することはできないという事態に変化はない。こうしたオートポイエーシス・システムにもとづくルーマンの認識プログラム——作動構成主義——が成功しているかどうかについては稿を改めて検討したい。

## 6 おわりに

本稿の目的は、心理システムからみたコミュニケーション概念、ひいては社会システム概念を概観することにある。しかし、最後に、ルーマンの心理システムのとらえ方について、かれによってしめされたもう一つの可能性を検討してみたい。

ルーマンの表現では多少はっきりしないところがあるが、説明を入れ替えれば次のようになる。まず、特別な身体と意識とが区別される。この特別な身体とは知覚野の中でつねにそばにいとされる身体である。つまり、他者の身体とは区別される身体である。そして、どこにあるかわからない意識をこの特別な身体の内側に位置づける。そのことにより、この身体は——意識にとって——いわば「私の」身体となる。しかし、この身体の「内側」とはどこなのであろうか。そもそも「内側」などといったものがある

のだろうか。いずれにせよ、どこにあるかわからない意識を内側に位置づけなければ、「私の身体」など構成されないはずである。そもそも、先の引用で傍点をつけたように、ルーマンは自分の「身体をその環境において外から識別するように識別できる」(1989, S.129)としている。逆に言うならば、「内側」をみているのではない<sup>12)</sup>。

誤解を恐れずにいえば、すべては心理システムによる構成である。「私の意識をとまなう私の身体」とその環境。そしてその環境のなかには、「他の意識をとまなう他の身体」が存在する。そうした他者を他我とし、自我が他我の表出をある情報の表れとして理解する。しかし、他我がどのようなことを考えどのようなことを知覚しているのかは不明であり続ける。私たちにできることは、環境や他我を外化することなのであり、いわゆる「外」などを知ることはできないのである。だからこそ、コミュニケーションは人間が行うものでも意識が行うものでもない、とするテーゼがあらわれるのであろう。コミュニケーションとはいわば2つの世界のできごとを構成要素とするできごとということもできよう。さらには言語をもちいた情報が継続的に再生産されていく過程ということもできよう。そうしたコミュニケーションを再生産していくシステムとして社会システムをとらえるならば、社会システムだけがコミュニケーションというできごとをつくりだしていく、というルーマンのテーゼも理解しやすいのではないだろうか。

#### 註

- 1) 実際に「他者」と「私」という表現でも、コミュニケーションを説明するだけならさほど困らないはずである。
- 2) やむを得ない場合には「送り手」、「受け手」というようにかっこをつけてもちいることにする。
- 3) 本稿では、通常「伝達」と訳されることの多い, Mitteilungを「表出」と訳しておくことにする。その理由は、ルーマンにあっては情報は伝達されることはないものとされているからである。この点については、かれ自身の用語の選択も必ずしも適切ではなかったと思われる。このことばを外国語に翻訳することは難しいとして、英語ではたとえばutteranceを当てたりしている。また、かれに比較的近い立場にあるペーター・フクスはÄußerungをもちいている。本稿の訳語はこのフクスの用語を翻訳したものであるが、いずれにしても日本語としてはあまりしっくりこないのは否定できない。
- 4) この解釈はBerghaus, 2003によるものである。他の帰属の可能性もあるが、それについては稿を改めたい。
- 5) 他我的行動を表出としてとらえることは、内容的な理解と区別して、「形式的理解」といわれることもある。ルーマンのコミュニケーション概念にあたっては、この形式的理解がコミュニケーション成立の決定的契機である。
- 6) この内容的な理解は次のコミュニケーションの出発点として分析できるものであるが、本稿ではこれ以上説明することは割愛する。
- 7) この場合には、もう少し条件をつけ加えた方がよいかもしれない。つまり、相手の指や

目の動きを表出と理解した自我が、それにもとづき相手に一定の行為で応えたならば、という保留をつけた方がいいかもしれない。ただし、このことは他のコミュニケーションでも事情はさほど変わらない。コミュニケーションは継続的だからである。

- 8) 情報がシステム内で構成されるということについては、十分注意をはらう必要があるだろう。
- 9) ただし、こうした自己言及の他に、社会システムとしての自己に言及することもある。ルーマンはこれを「反省 (Reflexion)」というが、本稿ではこれ以上ふれることはしない。
- 10) 通常のルーマンの翻訳では「観察する」という訳語が当てられている。内容的には、ある区別をし、その区別によってつくられた両側のうちの一方を指示することを意味する。
- 11) この記述は、Luhmann 1989, 128f.による。彼にとってIdentitätとは、社会的に不変的なものとして通用している観念であり、したがって、そこで問題になるのはその観念の本質が「何」かということではなく、その観念が「いかに」して構成されたのかということなのである。確固とした実体があるわけではない。それゆえに、確固とした普遍のものがあるという考えが、いかにして成立したのかを問題にしなければならないのである。こうした不変的な観念構成の説明の例としてはこの分析はきわめてすぐれているように思われる。
- 12) もちろん、ルーマンとしても、その必然性がないことは十分に気づいていると思われる。かれの研究のためには、社会通念がいかにして構成されるのかを記述することが必要だからである。だからこそ、わざわざ「ゲスト」ということばを選んでいるのであろう。身体の問題についても稿を改めて論じたい。

## 文献

- Berghaus, M. (2003) :Luhmann leicht gemacht, Köln Weimar Wien.
- Luhmann, N. (1984) :Soziale Systeme. Grundriß einer allgemein Theorie, Frankfurt a. M. 佐藤勉監訳『社会システム理論 (上)(下)』恒星社厚生閣.
- (1988) :Erkenntnis als Konstruktion, Bern.
- (1989) :Wahrnehmung und Kommunikation sexueller Interessen, in: Rolf Gindorf/ Erwin J. Haeberle (Hrsg.), Sexualitäten in unserer Gesellschaft. Berlin, S.127-138.
- (1990a) :Die Wissenschaft der Gesellschaft, Frankfurt a. M.
- (1990b) :Das Erkenntnisprogramm des Konstruktivismus und die unbekannt bleibende Realität, in: N. L., Soziologische Aufklärung, Bd. 5. Opladen, S.31-58.